

# 保 育 あ き た 瓦 版

第61号 令和4年8月 秋田県保育協議会 広報委員会



## 保育あきた瓦版に寄せて

秋 田 県 保 育 協 議 会  
会 長 大 友 潤 一

平素は当協議会の活動に御理解と御協力を賜りましてありがとうございます。

年に一度、「保育あきた瓦版」に寄稿する時期が来ました。

去る、6月2日、3日に第50回秋田県保育研究大会が秋田市を会場に開催されました。初の試み「ハイブリット型」ということで、実行委員会の秋田市の先生たちは事前準備も、当日の現場に於いても、さぞ苦勞することだろうと思っていました。現実的に大変なご難儀をお掛けしました。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。研修委員の先生たちも、分科会発表の先生たちも、何度も練習を重ねました。私は基調報告を受け持ちましたが、全くのぶっつけ本番でした。分科会は、あのくらい練習を重ねても当日のトラブル。基調報告、記念講演はリハーサル無しではやはり御迷惑をお掛けしてしまった等、参加者のみなさんには大変申し訳ない点がたくさんありました。しかしながら参加者のみなさんの御協力で何とか終わることが出来ました。御礼を申し上げます。ありがとうございました。来年の鹿角大会や再来年の北海道・東北ブロック大会に向けて、良い経験として糧にして参りたいと思います。今後とも各地区の協力を宜しくお願い致します。

秋田県保育協議会として、組織のシンプル化、スリム化に向けて、秋田県民間保育協議会常任委員会とも連携して、協議を重ねております。令和5年4月からは正式に一本化する予定でいます。公立保育協議会の先生たちとも一本化に向けての情報の共有化を図っています。事業、会計、まだまだ調整していかなければならない問題も山積しています。しかしながら、各部、各委員会の先生たちが粉骨砕身、頑張ってくださいています。一歩ずつ確実に歩を前に進めております。若い青年部からも今どきの意見もいただいています。顧問からもありがたい御助言をいただいています。広く多くの方たちから意見をいただいて、大変ありがたい状態です。手探りの状態での船出にはなるとは思いますが、出来る限り会員園の皆様には御迷惑をかけないように準備して参りたいと思います。

コロナウイルス感染症が治まりかけたと思ったのですが、東京では3か月ぶりに一日の感染者数が3万人を超えました。(7月24日現在) 新たな変異株BA・5が今後感染を拡大していくのでしょうか。研究大会や研修、会議等、集合型で開催出来ると願っていましたが、それも先延ばしになってしまうのかと落胆しています。いつもはポジティブに物事考える自分ですが、さすがに第7波には悲観的になっています。皆様や子どもたちが感染しないことを祈るしかできません。十分にお気を付けてください。

最後となりますが、今後とも当協議会の活動に御力添えをいただきますよう、何卒宜しくお願い致します。

## 保育研究大会を終えて



第50回秋田県保育研究大会実行委員会

委員長 三條 正 弘

県内205施設から558名の参加申し込みがありました。中には同じ園から13名参加という園が2園ありました。自園の子どもたちとどう向き合っていくのか、大会に参加することで、その視点を少しでも増やす機会にしようという熱い思いをひしひしと感じます。

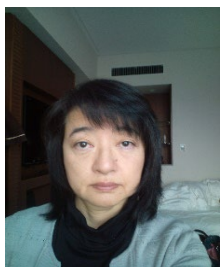
発表いただいた17園の皆さまには、発表にこぎ着けるまでに幾多の困難を乗り越えて来られたことでしょう。毎日の保育を積み重ねながら研究をまとめ、研究の成果をさらに日々の保育に生かしてこられた発表園の皆さまの努力、チームワークの素晴らしさに大きな拍手を送ります。

新型コロナウイルスは、この2年半の間変異を繰り返しながら何度も何度も私たちを翻弄し続けています。そんな中にあっても、第50回を数える歴史あるこの研究大会が、ハイブリッド形式とはいえ秋田市を主会場に開催できましたことは、会員の皆さまの多大なご協力のおかげです。ありがとうございました。内容につきましても分科会発表園に加え、パネルディスカッションで自らコーディネーターを引き受け、示唆に富んだ提案に導いていただいた沼館保育園の高橋大成園長先生、そして大会運営に尽力いただいた秋田市内53施設の施設長の皆さんにも、実行委員長として心から感謝申し上げます。

私のもとに大会の資料の校正本が届いた日、私は思わずその内容に引き込まれ、時の経つのを忘れていました。発表園の取り組み内容は発表のためだけに取り繕われたものではない「本物」のすごさを感じさせてくれました。また、皆さんは表紙の絵を見てどう思われましたでしょうか。1904年秋田市生まれの世界的に有名な版画家「勝平得之（とくし）」の作品です。「本物」の中身にふさわしい「本物」の表紙にすることができたと思います。ただし大会運営については、大会後の実行委員アンケートによると数多くの反省点があげられています。記録に残して次の大会へお送りしますので、ぜひお役立てください。

私は大会開催要項の趣旨説明で『コロナ後を見据えて～』と書きました。果たしてコロナ後は本当に来るのだろうかと思心暗鬼に駆られます。しかし、未来がたとえどんな状況であろうと、今目の前にいる子どもたちがそこを生き抜いていくことは間違いありません。本研究大会に参加することで得られた貴重な知見を、自園の保育に生かしていきましょう。私たちの日々の子どもたちとの関わりが、未来を切り開いていく大きな力を育てていることを信じて。

## 保育研究大会を終えて



第50回秋田県保育研究大会実行委員会

総務部門長 鷺尾 道子

総務部門の仕事は、開催までの作業が比重的には大きかったように思います。事前の作業は主に、参加費振り込みの確認、名簿作成、大会資料の配布準備、当日の必要物品の準備等。当日は、参加者受付から来賓接待、駐車場待機、昼食の配布等、各役割。そして大会後の助言者・パネリストの皆様へのお礼品送付。当日は、細かい雑用があれこれ生じて、会場にいる時間よりも動き回っている時間のほうが長かったけれど、全体的には、総務部門の先生方、事務局の齋藤さんに助けられて何とか終わったという感じです。皆様、ありがとうございました。

何よりも今回は、これまでと勝手が違い、どの部門も大変だったのではないのでしょうか。一つは、ハイブリット型の開催であったこと。会場をリモートでつなぐ作業は、研修部門や県保協研修委員の先生方、難儀されたと思います。一つは、参加者の宿泊という設定がなく旅行会社が間に入らなかったため、申し込み者の名簿作成から入金確認までの作業がありました。一つは、宿泊があれば自動的にホテルが会場になったところでしょうが、宿泊がないため社会福祉会館が会場となりました。ホテルを使用すれば、会場や各部屋のセッティングなどかなりの部分でホテル側の手を借りられ、運営部門の負担も軽減されたのではないのでしょうか。こんなわけで、どこか一か所でも業者さんに本格的に入ってもらえば、もう少し手際よくできたかもしれないと思います。一方で、今回我々だけでここまでできたのだから、もしかしたら次回は同じ状況でもっとうまくいくかも(?! )とも思いますが。

最後に、資料作成について。研究発表のページは県保協研修委員が担当なさり、それ以外の部分を実行委員会で進めました。過去に横手市の矢口高雄や、にかほ市の池田修三の作品が表紙を見事に飾っているのを見て、今回の表紙は秋田市出身の版画家・勝平得之がいいのではないかと思います、開催に合わせた季節の作品を選びました。それが表紙の「草市」です。大町の赤れんが郷土館に彼の記念館が併設されているので、秋田市の優れた芸術家の作品に是非触れてみてください。

## 保育研究大会を終えて



第50回秋田県保育研究大会実行委員会  
運営部門長 上村 清吾

この度の秋田県保育研究大会は、初めてとなるハイフレックス方式（現地及びネット両参加型開催）にて実施されました。実際に少々のトラブルもあり、参加された皆様方へご不便とご心配をおかけいたしました。関係スタッフ間での連携や何よりも参加していただいた皆様からの寛容さに支えられ、2日間の研究大会を終えることが出来ましたことを感謝しております。

昨年度の8月中旬頃の事だったと記憶しておりますが、大会実行委員長である三條正弘先生から突如お電話をいただきました。「秋田県保育研究大会の実行委員の一人として上村先生も協力してもらえないですか。」という温和で物腰柔らかな言葉に促され、安易に私が「全く経験がないので、何も分かりませんが、それでも出来るのであればご協力いたします。」と回答してしまったのが、結構な負担を感じながらも自身の社会経験を積み重ねさせていただく貴重な機会となりました。

実行委員長はじめ、この度の実行委員のほとんどの先生方が保育研究大会の運営主催者側として携われるのが初めての方々であり、その上でコロナ禍を見据えながらの大会運営とする必要もあったことから、『何から何をどう検討をし始めればいいのか』というのが第1回目の実行委員会後の私の本音でした。また、結果としてハイフレックス方式という新たな開催形式が決定され、そのための準備や内容を過去の研究大会の要綱等を参考にしながらも、全く新たな開催手順等で検討・協議していく事項や必要性もあり、実際には日程編成や進行等の内容構成なども、研究大会の数日前になっても最終調整を行いながら、期限ギリギリを乗り越えて当日を迎えたのが事実であります。

終えてみると様々に、『ああすれば良かったかも、もう少しこうしていたら・・・』と考えが過りますが、実行委員や各部門の先生方と評価・反省をした内容を三條実行委員長がとりまとめでいただき、『報告書』として細かな部分まで記載されておりますので、次回以降の研究大会等において運営主催する方々が同様な開催形式を設ける際の参考になればと思います。

私自身は、実行委員・運営部門長としての期待には程々応えられるような働きは出来なかったと反省しきりですが、共に責務を果たすべく協力し合った先生方に助けていただき務めることができましたことを改めてこの場をかりてお礼申し上げます。

来年度は鹿角・県北地区での開催と伺っております。来年こそは全参加者が、現地にて保育の学びや互いの懇親が深められる研修機会になることを祈念し、この度の実行委員の一人として、まとまりのない所感とさせていただきます。当研究大会に関わっていただいたすべての皆様方、本当にありがとうございました。



# 保育研究大会を終えて

第50回秋田県保育研究大会実行委員会

研修部門長 長谷川元子

この原稿の依頼を受けた時には、どうしたものかと悩みました。分科会を担当したのは、もう随分前のことの様な気がします。

私たち研修委員2名と県の研修委員、3名が一組となって、一つの分科会を担当しました。これまで、Zoom（ズーム）での研修を受ける機会はそれぞれあったものの、パソコンでの入室許可と名簿チェックは経験がほとんど無い中で、事前の練習もほとんどできない内容でもあった為、正直ぶっつけ本番で臨みました。

当日は、最初のグループの様子を見守りながら、それを参考にして、自分のグループの出番を待つこととしましようという打ち合わせでしたが、いつの間にか3つのグループが協力し合って対応していました。

そして、次の分科会でも全てのグループが一緒になって対応していくという形ができあがっていました。これが臨機応変。

何百件というデータの処理には、この人数と時間では難しいと瞬時に判断し、誰からともなく自然に協力体制ができあがりました。さすが、常日頃、決断を迫られている園長先生たちの集団だからこそそのフットワークの良さだと感じました。

初めてのハイフレックス方式による保育研究大会ということもあり、実行委員会も前日ギリギリまで行うこと、なんと11回も。やるたびに、色々と細かな疑問がわいてきて、なかなか話が進まなかったこともしばしば。スタッフの人数が多いから何とかなるだろうという思いと、人数が多すぎて役割分担をどうすれば良いのか等々。終わってみれば、反省することばかりです。

コロナ禍だったからこそそのハイフレックス方式でしたが、秋田市開催だったからできたんだということで終わらせずに、今後に生かせそうな部分が沢山あるように思います。まさに、パソコンでの入室許可は、その良い例になるのではないのでしょうか。地域によって園の数が極端に少なかったりしますので、わざわざ現地でやらなくても済むことは、なるべく協議会の事務局が中心となってできる事をやっていく方が、地域での負担軽減になるのではないのでしょうか。

毎回、同じことで頭を悩ませる必要もなくなると思います。

研修に参加する側としても、場所やその時の状況によって、選択できる方が参加しやすいのではないかと考えます。私個人としては、できれば、ハイフレックス方式を今後も続けて欲しいと思います。

ともあれ、沢山の方に分科会に参加いただきまして、ありがとうございました。



## 保育研究大会を終えて



社会福祉法人湯沢保育会 深堀保育園  
保育士 山田千春

令和4年6月2・3日に行われた「第50回秋田県保育研究大会」の発表園として参加させて頂きました。

「再来年、うちの園が保育研究大会で発表になるけれど、先生達が主としてやってみない？自分達がやっていることを文章にまとめれば大丈夫だから・・・」と言われ、軽い気持ちでスタートした研究でしたが、現実には「研究」について辞書を引く所から始まり、言葉選び、文章の構成の難しさなど、不安ばかりが付きまといました。しかし、子ども達のやってみたい、知りたい、試してみたい姿を見守り、寄り添い、その姿を見逃さず全員で子どもの姿を読み取ることで、少しずつ不安が解消していったような気がします。発表でもお話ししましたが、深堀保育園は田んぼに囲まれています。数年前までは「田んぼしかない園だから」とマイナスイメージでしたが、今は「田んぼの中だからこそ、四季の豊かな自然に囲まれて、のびのびと育っていくことができる」と思っています。

当日までの発表に至るまで、園の中でもズーム発表を繰り返し行い、意見を聞いたり、マイクを新たに購入してもらったり、「大勢の人の前で発表しなくても良い」というプラス思考で臨んだつもりでしたが、リハーサルでは大いに緊張し、声が震え「皆さんの前で発表できる機会なんてなかなかない。発表できることを楽しんで！」というアドバイスをいただきました。他園の方からも「頑張って！」「楽しみにしています」というエールも心強かったです。しかしながら、発表当日はなぜか不具合があり、接続がうまくいかず・・・出鼻を挫かれ、緊張よりも「もう頑張るしかない」という気持ちでスタートしました。30分の発表はあっという間でしたが、やはりリモート発表で良かった・・・とあがり症の私は思いました。発表にあたり、段ボールで防音してもらったり、送迎の保護者の方にもご協力をいただいたりしたことにも本当に感謝しています。

研究を振り返り、助言頂いたことを今は園全体で話し合っているところです。今後も子ども達の姿をしっかりと見取り、見守り、寄り添い、生きる力の基礎を培うことができるように子ども主体の保育を進めていきたいと思えます。

～いつか子ども達が大人になった時に、地域の良さを思い出してくれますように・・・～



## 保育研究大会を終えて

社会福祉法人キッズハウスもりやま  
幼保連携型認定こども園 もりやまこども園  
主任保育教諭 菅原真理子

本大会に、発表園として携わることとなり、発表までどんな道のりが待ち受けているのだろう…と不安もよぎりましたが、これまで同様実践を積み重ねていこうと取り組んできました。

『心身ともに健康で、意欲的に遊ぶ子どもを育てていきたい』と、テーマを共通理解し進むまで、職員間で様々な意見を交わしました。その中で、子どもの育ちをみる視点や、関わり方等で「どうしても私達と保護者の間にはズレがあるよね…」という話が出されました。この“ズレ”という表現は適当でないと思いますが、日々の保護者連携の中で感じる『あるある』なのです。もしかしたら、相手もそう思っているかも知れません。

研究では、子ども達の健やかな育ちを一緒に支えたいと、『保育を可視化する』という方法を用いました。保育者と保護者が共に学び合える関係であることが、子どもの心身の健康に重要だと考えたからです。コロナ禍と重なり、外への発信が難しい状況でしたが、だからこそ改善・工夫して発信する意味も増しました。私達の中では、子どもが遊び出す為は情緒の安定が大切だということは常識です。しかし、保護者の認識ではそうではないのかも知れません。そうした所から、「他者の立場からはどう見えるのだろうか」「目を見た方が分かりやすいよね」「この場面を写真で共有できたら、〇子ちゃんにとって安定や育ちにつながっていくかも知れない！」と、活発なカンファレンスで保育の振り返りをするようになり、時には、保護者と一緒に手立てを考えるようになりました。連絡帳への写真添付、ドキュメンテーション掲示、おたよりで懇談会をする等、私達も取り組みの楽しさを感じ、発信する力もついてきました。

研究を始めた3年前、こんな思いには至らなかったと思います。連携において『ズレがあって当たり前。そのことを前提とし、子どもを中心に語り合う関係を根気よく積み重ね、程よい距離感でつながり続けていくことが大切』と今は感じています。今後も“楽しいからもっと遊びたい”と意欲溢れるもりやまこども園の子ども達の成長を、職員保護者と一緒に支えていけるよう励んでいきたいと思います。発表園として、様々な資料作成等でドタバタしながらも貴重な経験でした。また、職員間で学び合い、協力し合って発表を終えられたことは財産となりました。学びの機会を頂けたことに感謝しています。ありがとうございました



## 保育研究大会を終えて

社会福祉法人翼友会 ナーサリー土崎  
園長 櫻庭 由美

保育研究大会の発表がコロナ感染症により1年延期となり令和4年度の発表園となりましたが、研究に取り組む年数が1年長くなったことで研究を深めることに繋がったように思います。

4年前、発表のテーマを何にするのか決めるために職員アンケートを取りましたが、絞り込めず最終的に話し合いでナーサリー土崎の子どもたちが喜んで取り組んでいた「食育」ということになりました。

テーマが決まってからは、ナーサリー土崎の食育と言ったら「畑作り」ではどの意見が出て、研究を進めていく中で「畑作りを子ども達、主体にしていくにはどうしたらいいのか？」という大きな壁にぶつかりました。

更に話し合いを行い、「職員が野菜の育て方を学び実践していかなければ、子どもには伝わらないのでは」との意見が出て、野菜をうまく育てるために色々な方法で調べて試行錯誤しながら畑づくりを進めました。時には枯れてしまったり、うまく実りに繋がらなかったりした時もありました。

そのような日々を過ごしている中で、職員から昼休憩時に「畑を作るようになったら自分が休みの日や連休には、野菜大丈夫かなと思いき朝寝ていられなくて休みの日に様子を見に来てしまいました。水もやらなければと思ってしまって…」という話がでて「こんな思いになっている自分が不思議なのです。」との声が聞こえてきました。

この話から子どもたちが主体的に畑作りをするには、この職員の思いと同じ思いが子ども達にも芽生えたら、きっと畑作りは変わると思いました。その後、職員で話し合い色々な試みを行ってきたことが、「Enjoy! 野菜 Life」の研究発表の内容へと繋がっていきました。

今回の保育研究大会を通して、私自身・そして職員が感じたのは「子どもも生物も動物も育てる為には、やはり不可欠である『愛・love』がなければ育たない。」ということでした。

そして「畑なんてやったことがない。」と言っていた職員が殆どでしたが、いつからか自宅でも畑を作る職員が増えています。

子ども達の中にも、この幼児期の体験がいつの日か「あの頃こんな思いでトマトやキュウリを育てたよね!」「採れたての野菜は甘くておいしかったなあ…」と思い出し「畑作りをやってみようかな」というきっかけになってくれたらと思い取り組んできました。

保育研究大会を終えた今も、ナーサリー土崎全職員で保育園という畑にいろんな種をまいています。いつの日か大きな実りに繋がるように…



## 第70回 北海道・東北ブロック保育研究大会選考会研究発表園

分科会	園名	提案者	発表テーマ
1	もりやまこども園	主任保育教諭 菅原 真理子 副主任保育教諭 平塚 しおり	子どもの健やかな育ちを目指して
3	小友保育園	主任保育士 金子 綾子 保 育 士 安倍 千春	つながり育ちあう保育を目指して
4	こどものいえ保育園	主任保育士 虻川 真理子 保 育 士 加藤 未来 保 育 士 相川 詩歩	家族の関わりを深めるために
6	ナーサリー土崎	主任保育士 大塚 奈々 栄 養 士 成田 望	Enjoy! 野菜 Life!

◎北海道・東北ブロック保育研究大会選考会で、第3分科会小友保育園・第4分科会こどものいえ保育園が表彰されました。おめでとうございます！

ご出場おめでとうございます！第65回 全国保育研究大会

社会福祉法人翼友会 ナーサリー土崎  
「Enjoy！ 野菜 Life!」～未来を生きる子ども達のために～



### 編集後記

蝉の音が賑やかに聞こえてきました。子どもたちは蝉とりや、プール遊び、夏野菜の収穫等、夏ならではの体験を楽しんでいます。新型コロナウイルス感染症はこれまでにない感染拡大をみせ猛威を振るっています。毎日のコロナ対策本当にありがとうございます。共に頑張りましょう。

第61号は6月2, 3日に開催されました「第50回秋田県保育研究大会」についての特集となりました。発行にあたり、お忙しいなか、寄稿いただきました皆様には本当に感謝申し上げます。ありがとうございました。

(広報委員会副委員長 大門ヒサ子)



## 広報委員名

担当副会長  
広報委員会委員長  
広報委員会副委員長  
  
委員



松橋 千幸	(白岩小百合保育園)
佐川 ひとみ	(幼保連携型認定こども園ふじ)
星川 育子	(川添保育所)
大門 ヒサ子	(こどものくに保育園)
仲塚 鈴香	(若美南保育園)
織田 羽衣子	(石脇西保育園)
熊谷 幹雄	(アソカ保育園)
西村 優子	(みたけこども園)
畠山 睦子	(花輪にこにこ保育園)
茶谷 洋恵	(城南保育園)
高橋 さおり	(二ツ井子ども園)
高橋 朝子	(四ツ屋こども園)

